

ボクとニキと鴨



公立高校の発表の日。

僕の名前は合格者掲示板になかった。

頭の中が真っ白になる、というのはこういう状態なんだろうなあ。

その高校から、どうやって中学校に戻り、教師連中にどんな報告をしたのか、ぜんぜん覚えていない。

気がついたら、中学校と家の中間にある公園に来ていた。

公園の『ひょうたん池』と呼ばれる池で、手すりにもたれかかって、ぼーっとする。

第二志望の私立高校に落ちたとき、

「遊んでばかりいるからだ」

だの

「情けないやつだな、お前は」

しか言わなかったクソ親父は、今回はもっとうるさいんだろうな。

中学に入ったときから塾に毎日行かされ、休みの日も勉強ばかりだったのに

『遊んでばかり』はないよなあ。

「あんた程度の頭の出来じゃ、息子もこの程度なんだよ」

と、言ってやればよかった。その時は口には出さなかったけど。

ぼんやりそんなことを考えていると、額に冷たい物が当たった。

雨だった。

池の水面に波紋が広がり、すぐに雨水の跳ね返る音でいっぱいになる。

こういう時に限って、傘は持ってない。

まあいいやと、そのままほっておく。

ふいに背後から

「濡れちゃうよ」

という声がした。

振り向くと、黄色い傘を持った髪の長い女の子が立っていた。

「濡れちゃうよ」

切れ長の目で僕をじっと見つめながら、その子はもう一度言った。

「そうだね」

僕はそう応えた。

「なんで傘ささないの？」

「持ってないし」

「濡れても平気なの？」

「平気じゃないけど」

「入れてあげよっか」

と言いながら傘を差し出す。　なんか嬉しそうだ。

「別にいいよ」

と答えたら、女の子が悲しそうな顔になったので、慌てて

「やっぱり入れて」

に変えた。

「うん、いいよ！」

嬉しそうな顔に戻った。 ちょっとほっとする。

女の子との身長差が結構あるので、腰をかがめながら傘に入る。

この状態で立っているのは、ナニゲに辛い。

「僕が持とうか？」

「そうだね。 お兄ちゃん、なんかキツそうだし」

傘を受け取り、二人並んで立つ。

しばらくぼんやりと池をながめていた。

「あー、アヒルだー」

女の子が指差す。

「アヒルじゃないよ。 鴨だよ」

「カモ？ だって、ガアガアって鳴いてるじゃん。 アヒルだよー」

池には数羽の鴨が泳いでいる。

その中の一羽が、僕達のそばに寄ってきていた。

他の鴨と比べると身体に白い部分が多い。

特に顔のあたりはほとんどが白色で、目の周りだけが黒っぽい。

アヒルに見えないこともない。

「合鴨ってやつかもしんない」

「アイガモ？ アヒルとどこが違うの？」

「わかんね」

その鴨は、じっとこちらを見ながら鳴いている。

「カモさん、なんか言ってるよ」

「腹減ってんじゃないかなあ」

「パンとか食べるかな」

「食べんじゃねーの」

女の子は背負っていた赤いランドセルを下ろし、中からクロワッサンを一つとりだした。

「えへへ。 今日の給食で残しちゃったんだ」

と、なぜか照れ笑いしながら、クロワッサンをちぎって池に投げ始めた。

白い鴨は、むさぼるように食べる。

様子を察知した他の鴨も集まってきて、水音をバシャバシャ立てながら食べている。

そしてエサがなくなると見るや、すぐに離れていった。

ゲンキな奴らだ。

「ここで何やってたの？」

女の子が聞いてきた。

「えっ？」

「なんか、嫌なこととかあった？」

「……なんで、そう思うわけ？」

「んー、なんとなく」

そんなに、テンパった顔をしてたのだろうか。

していたかもしれない。

それとも、やたら勘のいい子なのかな。

「行きたかった高校に落ちちゃってさ」

「あー、テストだめだったんだー」

無邪気にニッコリ笑われた。　なんかムカツク。

「おまえ、わかってんのかよ。 ただのテストじゃねーよ。 受験だぞ」

「知ってるよー。 あたしのクラスにも来年受験する子いるもん」

「小学生だろ。 中学受験じゃねーか。 別に落ちたって公立行けんじゃんよ。

高校はそうはいかねーんだぞ。 行くところ、なくなっちゃうんだぞ」

「行く学校ないの？」

「……ん、いや……、ないことはない……けど……」

スルドイ突っ込みをする奴だ。 一瞬、口ごもっちゃったじゃないか。

「じゃあ、いいじゃん。 それから、『おまえ』じゃないよ。 ミキだよ」

口をとがらせている。 ちょっとカワイイなと思った。

「ミキってゆーのか、おまえ」

「ほら、また『おまえ』って言ってるー」

「わかったわかった。 どうせ、木の『幹』って書くんだろ」

「なにそれ。 違うよー。 美しい樹木の『樹』だよ」

「はいはい。 美樹ちゃんね」

ムキになっている様子を見ていると、ますますからかいたくなってくる。

とりあえず、その衝動は抑えてみた。

「お兄ちゃんの名前は？」

「どーでもいーじゃん」

「やだ。 知りたい。 教えて」

「めんどくせーなあ。 勅使河原アキオってゆーの」

「変な苗字だね」

「うるせーよ」

またしばらく沈黙。

雨が傘に当たる音、鴨の鳴き声だけが聞こえる。

公園には僕達以外、誰もいない。

こんな雨の夕方に、公園に来る物好きはいないよな。

「はあー、めんどくせえなあ……」

「何がめんどくさいの？」

小声でつぶやいたつもりが、聞こえていたようだ。

また大きな目で、こちらを見ている。

よくこんだけ興味津々でいられるもんだ。

「親に、落ちたこと話さなきゃなんねーの」

「嫌なの？」

「嫌なのじゃねーよ。 嫌に決まってるだろーが。 受けました、じゃねーんだし。」

第一志望校だめでした、ちょーすべりどめの第三志望校に行きます、って報告するんだからよ」

「ふーん」

「そーすつと、ぜってー親父が文句たれるわけ。 普段、遊んでばかりいるからダメなんだとか、もっと

勉強しとけばこんなことにとかさ。俺は全然遊んでなんかいねーわけ。三年なってからは、勉強ばっか

してたんだよ。残念だったな、とか慰めてくれたっていいのによ。そんなこと、カケラも言わねーんだ、

あいつ」

「へえー」

しゃべっているうちに、だんだん腹がたってきてテンションが上がってしまったが、ミキの気のない応答で

なんかアホらしくなってきた。 頭が冷えた。

「おまえ……じゃなくてミキんとこの親父は、うるさくないのか？」

「うち、おとーさんいないもん」

「えっ……」

考えもしなかった答えを食らった。 次の言葉が出ない。

思わず美樹の顔をじっと見つめる。

「あたしがちっちゃいときにね、おとーさんとおかーさん、リコンしちゃったの。 だからおとーさんいないし、

よくわかんない」

いきなりの重い内容だ。

とゆーか、大人の内容すぎて僕にはフォローができない。

困ったなーと、思っていたら美樹が

「あたしね、ずっとおとーさんが欲しいなーって思ってたんだ」

と言って、にっこりと笑った。

「けど、おにーちゃんのお話きいてたら、なんか欲しくなくなっちゃった」

「いや、まあ……、うちのオヤジはうるさいけど……、一般的にはどうかなと……」

僕は、わけのわからないことを口ばしる。 この場をなんとかしなくては。

「ミキのお母さんは、どうなんだよ」

「働いてるよ。 毎日、毎日。あたしが起きる前にお仕事に行って、あたしが寝た後に帰ってきてるみたい」

「それじゃ、全然顔見てないんじゃない？」

「そうだよ。 あたし、いつも一人」

「そっかあ……。 大変なんだな。 おまえも」

「おまえじゃなくて、ミキだし」

「はいはい」

「ねえ、お兄ちゃん」

急に甘えたような声を出す。

「ん？」

「明日もここに来る？」

「なんで？」

「またお兄ちゃんとお話したいから」

「俺と話しても、おもしろくないと思うぞ」

ミキは首を横に振る。

「ううん。 楽しいよ。 なんか、お兄ちゃんと話してるとすごい楽しい」

「……」

本当に嬉しそうな顔でそう言われると、なんだかこっちも嬉しくなってくるから不思議だ。

「じゃあ、また明日ね。 バイバーイ」

ミキは傘をたたんで走っていった。

いつの間にか、雨は止んでいた。

入試と合格発表がすべて終わり、学校の授業は午前中で終わるようになる。

その授業も卒業式の練習ばかり。

これといってすることもなかったので、学校からの帰りには、ほぼ毎日公園に寄って、ミキと話をした。

家族のことや学校の友達のこと、好きなことや嫌いなこと、色んなことを話した。

四つ下の女の子の言うことだから、となめていたが、ナニゲにおもしろかった。

会話に夢中になって、気が付いたら、あたりは真っ暗なんてこともあった。

そんな毎日が卒業式のあとも続いた。

☆ ☆ ☆

かけらも良いと思っていなかった第三志望の高校は、入ってみると居心地がよかった。

よくよく調べてみると、この高校の校訓は

『毎日を楽しむ』

だった。

どうりで、がつがつ勉強する奴もいないし、教師連中もフレンドリーだ。

これで共学だったら言うことがなかったのだが、まあ仕方がない。

なにしろ第三志望校なんだから。

すぐに友人もでき、そいつらと遊びまわった。

こんなに学校へ行くのが楽しくなったのは初めてだ。

僕は『ひょうたん池』に行かなくなっていた。

楽しい高校生活を二年半ほど送った結果が、この模試の成績だ。

志望校の合格判定はどれも『D』。

受ける大学を変えたほうが身のためだよ、というわけだ。

どれも世間では大して名前も知られてないし、偏差値的にも50前後。

超余裕だと思っていたのだが。

この模試を主催した予備校は、結果をわざわざ学校経由で返してくる。

受けた我々よりも先に、教師がしっかり中身を見ている。

あんまり気分がよくない、ような気がする。

まあどうでもいいが。

気分がよくないまま学校を出たら、いつのまにか『ひょうたん池』に来ていた。

ここは僕の通学経路の中にあるのだが、落ち込むと身体が勝手にここへ移動しようとするみたいだ。

僕の顔を見て、池の鴨達がすーっと寄ってくる。

前は五、六羽だったが、今は三羽に減っている。

その中に、例の合鴨がいた。

まだ生きていたんだ、とちょっとびっくりした。

身体の白っぽい部分は、だいぶ薄汚れている。

目の周りの黒い毛はそのままだ。

元気よくグワグワと鳴く。

何か食べさせるものはないか、バッグの中を探してみる。

空の弁当箱しかない。（教科書はもちろん学校のロッカーの中に、全部置いてある）

「わりー。 食わずもん、ねーんだ」

さらにグワグワと鳴く。 かなり不満そうだ。 日本語がわかるらしい。

「文句言われてもー。 マジ、ねーから」

と言った後、何かが飛んできて、池にポチャッと落ちた。

パンのかけらだ。

鴨達は先を争って食べだした。

「鳥と会話してるし」

横から声がした。 制服姿の女の子が笑っている。

「勅使河原のお兄ちゃんだよね。 ちっとも変わってないから、すぐわかった」

「.....ミキ.....ちゃん.....？」

長い髪はシャギーが入り、ところどころ金色になり、背も以前よりかなり伸びているが、
確かにミキだった。

ひざ上丈のスカートから伸びる足に、目がいてしまう自分が情けない。

やっぱり男子校はダメだ。

「あー、覚えててくれたんだー。 よかったあ」

間延びしたしゃべりかたも変わっていない。

「三年ぶりだよね。 忘れられてたら、どーしよーかと思っちゃった」

「忘れてねーよ。 記憶力いいし」

「あはは。 自分で言うか？」

ミキは僕の隣に並んで、手すりにもたれかかった。

「あの鴨、まだいたんだねー。 長生きなんだね。 ほら、食べな」

そう言って、パンを投げ入れる。

池は奴らのパンの取り合いで、大騒ぎになった。

「また給食のパンかよ」

「あんまし、パン好きじゃないんだ」

「ふーん」

「お兄ちゃんは？」

「別に。 ふつー」

横目でミキをちらちらと見る。

制服の上着に見覚えがある。

「おまえ、もしかして俺の行ってたのと同じ中学？」

なんで今まで気づかなかったのか。

きっとスカート丈にしか、目が行ってなかったからだ。

「そうだよ。 四中」

「てか、おまえスカート短くしてね？」

「もちろん。 格好悪いんだもん」

「生活指導の宇多山がうるさいんじゃないの？」

「あー、ブタ山ね。 うるさいよー。 しょっちゅう言うてくるもん。 スカート元にもどせて」

「おまえらも、ブタ山つつてるんだ。 おもしれー」

「だって、ブタじゃん」

太っているので、いつもジャージの上着から腹が見えていた、国語の教師を思い出した。

やたらと服装チェックが好きで、ウザい奴だったなあ。

「そんじゃ四中から、家、近いんだ」

「違うよ。 ほんとは三中の方が近いんだけど、四中にしたの」

「なんで？」

ミキはパンを投げるのを止め、こちらを見た。

「お兄ちゃんと同じところ行きたかったから」

「え？」

「でね。 入ってから気がついたの。 あー、卒業しちゃってたんだーって」

「なんだそれ。 すげー間抜け」

「ひどーい」

「だって間抜けじゃん」

僕は笑った。 ミキも笑う。

「色んな人に聞きまくっちゃったよ。 勅使河原って人いませんかって。 でもさ、すごいがっかりしたんだ

からね、あたし」

ミキは池の方を向いた。

「だから、ここに来ればまた会えるかなーって。 しょっちゅう見に来てたんだよ。 ほとんど毎日」

「毎日？ マジかよ」

「マジだよ。 もっといっぱいお話したかったのにさ」

「俺なんかなくても、他に話し相手くらいいいんだろ」

「いないよ。 あ、友達はあるからね。 でも、友達と話してても楽しくないんだ。 話合わないんだよねー。」

お兄ちゃん、色んなこと知ってるもんね。 ハクシキってゆーの？」

自分が博識だとは、これっぽっちも思っていないが、十歳くらいのミキにはそう思えたのだろう。

なんか恥ずかしいぞ。

「みんな小学生相手だと、説教するとか馬鹿にしたような話し方で、ちょームカツクって感じだったんだけどさ。」

お兄ちゃんは普通に話してくれたし。 優しいって思っちゃった。 今もこうして友達みたいに話してくれてる

でしょ。 あたしの方が年下なのにさ。 なんか嬉しい」

視線だけを僕の方に向けて、微笑む。

ヤバイ。 ちょっとドキっとした。

「ちょっと、手出して」

「へっ？」

「いーから、手出してよ」

ミキは僕の手をつかんだ。 柔らかい感触が伝わってきた。

そして、残りのパンを握らせた。

「おい、なんだよ、これ」

「あたしもう帰るから。 あいつらにあげておいて」

「……帰るのかよ」

「うん。 明日も来てくれるでしょ？」

手は握ったまま、じっと目を見つめてくる。

これで冷静でいられる奴はいないだろうな。

「あ……うん……。 もちろん」

こんな答えしかできない。

「ありがと。 あとさ」

「なに？」

「男子ってみーんな女子のこと『おまえ』って言うから、慣れてるけど……。 次は名前と呼んでね。」

「じゃーねー」

手を振りながら走っていく。

一番最初に会ったときと同じだ。

僕はパンを握りしめたまま、ぼんやりと立っている。

池には、そのパンが投げ込まれるのを、じっと待っている鴨達がいる。

おわり